

令和二年度 卒業証書授与式校長式辞

式辞

藤小の正門から昇降口にかけての坂道は、桜の並木がとても美しい所です。その桜が今日開花しました。例年より早い開花は、何かとがまんすることが多かった今年、そして、6年間卒業生を守ってきた桜が、せめてもの門出にと、祝ってっくれてるかのようです。このよき日、たくさん届いるお祝いの言葉とご臨席いただいた保護者の皆様と共に、卒業証書授与式が挙行できますことに心からお礼申し上げます。さきほど小学校の課程を修了した77名に卒業証書を手渡しました。卒業生ひとりひとりがまっすぐにこちらを見すえ、その瞳に、未来への決意を強く感じることができました。

みなさんが過ごした六年間は素晴らしいものだったと思います。授業はもとより、運動会や校外学習。顔に汗し一生懸命に取り組んだ部活動などです。が、最高学年となったこの一年間から見ると遠い昔のことのようです。それでも6月から再会した学校生活の中で学校を支える頼もしい存在となり体も心も大きく成長しました。一年生と一

緒に清掃する時のまじめでやさしい態度。校外学習「カンドゥー」見せた楽しそうな笑顔。そして保護者会では、一人ひとりが将来の自分のことについて語る「開こう！未来へのとびら」の発表。内容もさることながら自分の考えを、大人相手に伝えようとする姿が頼もしかったです。

校長先生は知っています。ブラスバンド部の皆さんが、ラストコンサートにむけて本当に一生懸命準備してきたこと、その落とした涙を拭いてあげることにはできませんでしたがとても美しいと思いました。陸上部のみんなが冬の寒い朝、目的の大会がなくても自分自身の記録に挑む様子。その吐く息の白さが彼らを成長させるのだと思いました。

さて、そんなみなさんとは5年生の時の書字で、そして数時間でしたが6年生の社会科の授業で教壇に立たせていただきました。たのし過ぎて時にははめを外しすぎてしまつてごめんなさい。それではこれから最後の授業を始めます。温故知新（ふるきをたずね新しきをしる）は歴心の勉強をする時に話す論語の一節です。

昔、山口県に吉田松陰という人がいました。今

から約160年くらい前の人です。叔父さんの開いた「松下村塾」を引き継ぎ、多くの若者を集めた人です。その塾では一方的な授業ではなく、対話を重んじ、各自の個性や能力が大事にされ、塾生たちのたぐさんの可能性を引き出しました。ここからは幕末から明治にかけて活躍する多くの人材が輩出されました。その松陰が「何のために学ぶのか」と聞かれた時に彼はこう答えています。

「人は何のために学ぶのか。学ぶのは知識を得るためでも、職を得るためでもない。人にものを教えるためでも、尊敬されるためでもない。己のためじゃ。己を磨くために人は学ぶのじゃ」温故知新には温め直すという意味もあるそうです。中学に進学して、更にたぐさんのことを学ぶと思います。教科によって先生が変わり、より専門的な内容にもなると思います。時には今勉強していることが、本当に役に立つのか迷うかもしれません。しかしこの小学校から学びはじめ身につけた十代の知識や経験は一生忘れないと言います。迷ったときや困った時にはこの吉田松陰のパワフルな言葉をぜひ温め直してみてください。

保護者の皆様、本日はお子様のご卒業誠におめ

でとうございます。心からお喜び申し上げます。
六カ年の小学校生活を終え、今日を迎えられことに、思いもひとしおだと思えます。卒業生は、先ほども申し上げました通り、藤小でたくさん学び、活躍をしてれました。中学校でも同様に大きな力を発揮してくれるものと期待しております。しかしながら、これから思春期をむかえ、時には壁にぶつかり、悩み、心揺れることもあるでしょう。多感な時期を迎えるお子様の心を受け止め、優しさで厳しさを持って、温かく見守っていただければと幸いです。

卒業生の皆さん。今まさに歴史うねりの中にあります。みなさんがこれからの社会をリードしていくのです。藤小の卒業生として、誇りをもち、思う存分活躍して下さい。藤小小学校はこれからもここであなたたちを見守り続けます。藤小を巣立つ77名に幸多いことを祈念して、式辞といたします。

令和三年三月一七日

柏市立藤心小学校長 成島 敏恭